

ジャック・リブシッツ作《ハゲワシを絞めつけるプロメテウス》 —— 1937年のパリ万国博覧会における美術とイデオロギー

磯谷 有亮 (大阪大学)

1937年のパリ万国博覧会は、スペイン館に出展されたピカソの《ゲルニカ》や、対峙するドイツ館とソ連館など、美術と政治をめぐる話題には事欠かなかった。その中で、リトアニア系ユダヤ人彫刻家、ジャック・リブシッツ作の《ハゲワシを絞めつけるプロメテウス》(以下、《プロメテウス》)は、開催国フランスの出展作品のうち、明白な政治的メッセージを備えたほぼ唯一の作品である。本発表では、パリ国立公文書館などが所蔵する未公開資料から同作品の成立と受容の過程を詳細に分析し、当時のフランスにおける政治的イデオロギーと、万博という場との関連の中で、その美術史的意義を明らかにする。

《プロメテウス》は万博の主要パヴィリオンの一つ、パレ・ド・ラ・デクーヴェルト入口装飾のために時の人民戦線政府より依頼された高さ4.5メートルの石膏像である。プロメテウスを猛禽と格闘する姿で表したこの作品は、パレのテーマである科学の勝利を謳う一方で、鷲をシンボルとするナチスへの明らかな抵抗の意を込めて制作された。

同作品はパレ内部に約4ヶ月展示された後、屋外に移設されることになった。先行研究ではしばしば、作品の露骨な政治性に批判が向けられることを懸念した万博の委員会が、この彫刻をより目立たない場所へと移設したかのように語られてきた。しかし、委員会の議事録や書簡から判断する限り、この移設は展示替えという施設運営上の必須事項にすぎなかった。さらに移設先は、パレの内部よりはるかに人目を引く、シャンゼリゼに程近い一角であり、作品の政治的メッセージは抑えられるどころか、むしろより広く認知されるようになったのである。《プロメテウス》の持つモニュメンタリティとメッセージは、人民戦線政府の社会的芸術への志向と、反全体主義の思想に合致したプロパガンダとして積極的に利用され、機能したことになる。

作品と人民戦線政府との関わりは、作品に向けられた批判の動きからも裏付けられる。同作品は1938年の5月に、過激な右派の『ル・マタン』紙による抗議運動を受けて解体、撤去に追いやられた。同紙の批判の論調は、作品を人民戦線の負の遺産として扱うものだった。また、従来看過されてきたことだが、撤去運動の開始は第二次レオン・ブルム内閣の解散による政体の実質的な崩壊と期を一にしていたのである。

《プロメテウス》撤去後の顛末は定かではない。しかし、リブシッツは後年、像をめぐる一連の事件は「効果的だった」と語っている。右派左派両方の政治的意図に翻弄されたことが逆に「効果的」に、作品とその政治的メッセージを万博という国際的な場で多くの観衆に知らしめることに繋がったといえる。同じ万博会場内に展示されていたピカソの《ゲルニカ》と同様、リブシッツの《プロメテウス》は1937年に反ファシズムを掲げた作品の成功例として、時代のコンテクストとともに記録に残されるべき作品である。